

【 実践報告 】

人間福祉学会 実践報告会 活動報告

広島文教女子大学 人間福祉学会 事務局

I. はじめに

平成 28 年 10 月 1 日（土）広島文教女子大学人間福祉学会を開催しました。

今年度のテーマは、「学び続けること、実践を振り返ることの意義を問う」とし、卒業生 3 名による研究発表、卒業生・在校生によるシンポジウムを行いました。

大学卒業後、在校生が不安に思うことのひとつが、就職です。漠然とした不安にはじまり、職業選択の方法や、職場が自分を受け入れてくれるのかなど、その内容は様々です。卒業生には就職活動の方法やその分野へ進むきっかけの他に、働きはじめてから学び続けることの意義について語っていただきました。

第一部では卒業生 3 名の方に、職場の実践・研究発表大会や全国大会においてこれまで発表した内容を、本学会のために再構成し、報告していただきました。第二部では、在校生の代表 4 名が、卒業生に質問を投げかけるという形式でのシンポジウムを行いました。就職後の自己研鑽のイメージや、仕事をする中での不安などについて活発な意見交換がなされました。ここでは、この第一部・第二部の発表をまとめたものを報告いたします。



II. 内容の概要

第一部 卒業生による研究発表

12 期生 重村 有香さん

社会福祉法人三篠会 青葉さくら保育園 保育士

「自然の中で子どもたちの笑顔～トトロの里よりこんにちは～」(写真を交えて紹介)

今回の実践研究は当法人で毎年行っている実践・研究発表の大会に提出したものです。園で取り組んでいることや特色について、昨年度(就職1年目)に取り組んだものです。一人暮らしや職場の環境へ慣れることで大変ではありましたが、保育環境について考えるきっかけになりました。

現在は就職して2年目です。2歳児の担任をしています。東京ですが、自然豊かな環境に保育園があります。

当園は年間を通して自然と触れ合うことを大切

にしています。特に散歩では、その中で見つけてきた自然物や体験から、製作や新たな取り組みへと広げ、繋げていくことを通して、かけがえのない体験や経験をしてほしいという思いを持って保育をしています。その特色を生かした保育内容の確認と、今後さらに広げていくためにこのようなテーマで実践研究を行いました。

今年度は、散歩のさらなる充実や、散歩から広がっていった自然物を使用した製作や野菜作りを工夫しながら行ってきました。季節に応じた遊びや、その時期の虫や植物と出逢えるように散歩先を考えています。野菜作りはプランター以外に、肥料袋を使った省スペースの栽培にも挑戦しました。秋にはお芋ほりに行った後の芋づるでリースを作ったり、拾ってきたどんぐりや松ぼっくりで装飾製作、様々な玩具の作成や季節ごとの飾りづくりを行ったりしました。お散歩の途中で、自然物を使った見立て遊びをしている子どももいます。たくさん落ち葉を使って、ベッドやお風呂、シャワーに見立てたり、どんぐりと土を使ってケーキを作ったり、発想する力を遊びで工夫し、成長しています。遊具がなくても子どもたちで遊びを考えるようになります。

散歩に出ることで得る効果は大きく、基礎体力作りや足腰の強化、「よく食べ、よく眠る」という子どもたちの姿を実現しています。製作活動や取り組みでは、考えることや工夫すること、手指の発達などの効果もあります。

子どもは「ねえ、今日お散歩行ける？」と毎日のように聞いてきます。お散歩に行くことをとても楽しみにしており、雨でお散歩に行くことができない日は、水たまりや外の様子を興味津々で見ている様子を見かけます。

乳幼児期は心から楽しいと思える体験が大切です。その体験は、特別な活動ばかりでなく、園庭での遊びやお散歩、異年齢交流等といった毎日の活動から経験することができます。

保育士は当たり前の日々の活動を楽しいものに変えていく素敵な魔法使いです。私たちは常に明日を見据えながら、その力を磨き続け、これから

も子どもたちの園生活を豊かにしていけるように努めていきたいです。

10 期生 山下 未央さん

社会福祉法人正仁会

特別養護老人ホームなごみの郷 介護福祉士

「A 氏の看取りから学んだこと」

今回この発表のお話をいただいてから、自分の仕事をふりかえり、私が初めて担当職員として関わらせていただいた A 氏の看取りケアを発表のテーマに設定しました。

私が介護福祉士を目指したきっかけは幼少期から人と関わるのが好きで、福祉の仕事をしている母や姉の影響から介護の仕事に関心を持ったことでした。そして就職活動の時期に高齢者介護分野への関心が強まり、当施設への就職を決めました。

現在就職して 4 年目です。業務内容は、食事、入浴、余暇活動、そして看取りまでの支援を個別の状況に応じて行っています。

今回取り上げた A 氏（当時）について紹介します。88 歳、女性、要介護 5。病歴は子宮筋腫、圧迫骨折、脳出血（後遺症として左半身麻痺）。キーパーソンは長女。性格は穏やかで、いつも笑顔を絶やさず、職員にもいつも優しい言葉をかけてくださるなど周囲を和ませてくれる利用者でした。

A 氏が入所して約 2 年が経過した X 年 11 月頃より、徐々に食事摂取量が少なくなり、食べても食事を吐き出されるなどし、栄養状態の悪化が懸念されました。何とか元気になってもらおうと A 氏の好きな音楽や書道、また料理クラブなどのレクリエーションへの参加を促し、活動量を増やすことで食欲アップに繋げていけるようケアを行っていきました。また長女にはこれまで以上に面会に来ていただき、寄り添える時間を増やしていきました。その後食事摂取量はムラがあるものの増加傾向となり、少しずつ笑顔や発語も増え、以前の A 氏に戻りつつある様子が伺えてきました。

しかし 2 か月後、第 10 胸椎圧迫骨折と診断を受

けました。痛みのため、ベッド上での生活が主となりました。A氏の状態に応じたケア提供のため、長女や他の専門職を交えたケアカンファレンスの下、移乗方法や食事ケア、入浴ケア、排泄ケアを見直すことでA氏の身体的苦痛や精神的負担を和らげ、これまで以上にA氏の生活に深く関わり寄り添えるように努めました。

A氏の食事介助をしていた際に、目を潤ませながら「家に帰りたい…」とポツリと話されることがありました。ベッド上での生活が主となって以降、A氏が初めて自身の思いを口にされた場面でした。一時帰宅の実現に向けて職員、長女と協力することで最後の望みを叶えられるように検討しました。しかし、A氏の容態は日を追うごとに悪化していき、骨折から2か月を経過したころに、永眠されました。臨終の際には長女も立ち会われ、傍で看取っていただくことができましたが、A氏が口にした最後の望みを叶えることはできませんでした。

A氏が亡くなってからしばらく私は、心に穴が開いたような感じと喪失感で、気持ちを前向きに切り替えることができないままの日々が続いていました。長女からは「母は本当に幸せな最期を迎えることができたと思います。皆さんが何とか母の望みを叶えようと一生懸命に頑張ってくれたことは、きっと伝わっていると思います。本当にありがとうございました。」との言葉をかけていただくことができました。その時は率直に今までの関わりを認めてもらえ報われたような気がして本当に嬉しかったのを覚えています。

当施設では、大切な方が亡くなることの悲しみを少しでも癒すため、グリーフケア（悲嘆の癒やしケア）を取り入れています。四十九日を目途に生前のお元気だった頃の写真を中心に関わりのあったすべての職員からのコメントを添えた1冊のアルバムを作成してご遺族にお渡ししています。

介護の仕事は楽しいことだけではなく、辛く悲しいことも数多くあります。そして特養においては一人ひとりの利用者との出会いから別れまでの時間は決して長くない中で、その人の人生の最終章に深く関わり寄り添える貴重な仕事であること

を実感することができました。

A氏の看取りを糧に、少しでも心残りのない看取りケアに繋げていくことができるよう日々利用者に寄り添い、思いを形にできる介護職員を目指し、今後も努力を重ねていきたいと思えます。



4期生 村上 梢さん

NPO法人つくし工房可部 就労継続支援B型 精神保健福祉士

「利用者の自尊感情の回復変化を中軸にした生活理解への取り組み～真の個別支援の実現をめざして～」(写真を交えて施設紹介)

利用者の「働きたい」、「体力をつけたい」というニーズから支援計画を立てていますが、信頼関係が出来ていないと表面的な計画になってしまうのではないかと感じていました。ケアマネジメントの研修会に参加し、利用者の過去への深い理解が必要だと気づきました。この気づきをきっかけに、信頼関係の有無により、個別支援計画の内容そのものの変化や、信頼関係が出来たあとの再アセスメントの結果や変化について調査・研究をしていくことにしました。

2016年6月18日(土)に、同事業所の精神保健福祉士と本学の教員中村卓治氏と共同研究を行い、精神保健福祉士協会全国大会で発表をしました。今回はその研究について発表いたします。

研究の目的は、エンパワメントやリカバリーを志向した支援に必要な要素となる「利用者の自尊感情」の把握を中心に添え、その回復変化の流れやきっかけを注視しながら、それが向上していく

条件や関わりについて理解することです。

研究の方法は、再アセスメントの手順として、当事業所の精神保健福祉士の2名が手分けをし、各々の利用者に対して「人生曲線」と「エコマップ」のツールを活用しながら1時間程度の個別アセスメントを必要に応じて複数回行いました。

アセスメント作業では、発病と共に落ちていった人生曲線が再上昇し始める時点での生活状況や心理的状況の把握、あるいはエコマップにおける社会関係の変化を各利用者とひも解きながら過去の出来事の再評価を行いました。次に5名の対象者のアセスメントデータを一覧にまとめる中で見えてきたものを整理し、最後に再アセスメントを行った感想を利用者に伺いました。

人生曲線による全体的な気づきとしては、発病後様々な生活課題を抱え自尊感情を低下させた状況から改善を図るきっかけは、専門職を中心とした周囲からの働きかけによるものであること、そして、そこからの人生のさらなるステップは自らが行う、あるいは自らが周囲へ働きかけることができかけであることがわかりました。

一方、エコマップによる全体的な気づきとしては、精神疾患を患うことは、その治療に時間と労力を要するのみならず、質的・量的な面で社会関係に支障をきたすことが再確認できました。加えて、現在の生活においては（例えばピアカウンセリングの司会や、利用者の代表として地域の会議に出席するなど）、これまで他者から一方的に支えられる立場から、誰かを支える立場や役割を確保していくことが自尊感情の回復につながると確認できました。

再アセスメント後の振り返りにおいて、①生活を振り返る作業は、利用者自身に新たな気づきや自信を与える機会の一つになること、②利用者の過去の体験の意味合いや認識は、その後の生活体験に応じて変化すること、③「社会的役割を得ること」や「周囲と肯定的な関係でつながること」など、自尊感情の維持に必要な要素は障害の有無に関係なく共通していること、④（有効なアセスメントには）精神保健福祉士としての自己研鑽が

必要である、といった気づきを得ることができ、本取り組みに大きな意義を感じました。

再アセスメントの必要性や有効性は実感できたが、その一方で①アセスメントを確実に行うためのスキルの向上、②利用者に再アセスメントの成果を実感してもらえるような支援の実行、③事業所全体で組織的に再アセスメントに取り組む流れの構築、④再アセスメントを実行可能なものにするための作業の効率化、といった取り組み課題が明らかとなりました。



第二部 卒業生・在校生によるシンポジウム

- 学会発表への経緯、研究に取り組むきっかけ -

山下さん

「この学会のお話をいただいてから、考えました。思い入れのあったAさんのことをふりかえる時間がなかったので、今回をきっかけにやってみようと思いました。

今後も看取りはあります。今までは心残りが無いような関わりや、ふと立ち止まって考えることができていませんでした。ケアの方法や実践していたこと、不足していたこと、後悔していたことなど、その時は良いと思っていたことでも、振り返ると気づくことがあります。その良いきっかけになりました。」

重村さん

「今回発表させていただいたものは、法人内のベ

ストサービスアワードの発表のために作成したものをまとめたものです。今回提出したものは、予選までで本選まで行くことはできませんでした。しかし、園が大切にしている自然のある保育で、再確認や再発見することが多くありました。研究することで、意識しながら保育を実践することができます。1年目の実践で大変なこともありました。2年生に向けて成長できるきっかけでした。」

村上さん

「ソーシャルワークの勉強会を2か月に1度中村先生の集まりで行っています。その中で何か目標をやり遂げることをしてみないか、というお話をいただき、施設の職員と共に研究し、精神保健福祉士協会全国大会で発表することになりました。福祉の現場では、専門職としての実践は知識・技術に裏付けられているか、適切に使用されるには価値や倫理が必要であると言われていました。そして何を目的として実行しているのかとはっきりしなければなりません。言葉ではわかっていることに、経験を入れて、自分たちの蓄えを作る良いきっかけが学会発表であると思っています。私にはもっと学びが必要であると感じています。施設の研究をすることで、施設に新しい風が入ることにもなり、良い方向にいくことを期待したいです。」

- 4年生代表者からの質問とそれに対する回答 -

質問：4年生常本さん

「自然の保育を大切にしている園で、日焼けや虫刺されを気にされている保護者への対応はどのようにしていますか？」

回答：重村さん

「理解のある保護者が多いと感じています。虫よけスプレーで対応や、日差しが強い日は屋外での活動を減らすなどしています。園の方針で自然を大切にされているということを就職してから知りました。ですが、私の地元の園と似ているような環境だったため、違和感なく働くことができてい

ます。」

質問：4年生時乗さん

「福祉の仕事は、時間をかければ良い結果が出るわけではないし、見返りを求めるような仕事でもないと思っています。仕事の原動力になるようなものは何ですか？」

回答：村上さん

「働いていてよかったと思えることがないと、続けられないと思います。私は利用者の良い変化があること、私が小さな目標を達成することができると、嬉しく感じます。そのような小さなことでも自分にとって良いことが積み重なっていくことが働く原動力です。

私は、福祉に関心を持ち始めたのは、大学に入って障害のある方に関わってからです。私の存在意義や何か私にもできるのではないかと感じたのがきっかけで、今の私があります。」

回答：山下さん

「認知症などで暴言を吐かれる利用者が、『ありがとうね』と言ってくれることで報われることがあります。仕事で嫌なことがあると辞めたいなど感じることはあります。その思いが出てきては消えるという感じですが、消えるきっかけは、気持ちが報われるような出来事があったときです。」

回答：重村さん

「子どもがかわいいだけでは働けません。働く原動力は子どもが私を先生と声をかけてくれて、自分を必要としていると感じるときです。また、保護者と一緒に子どもの成長を感じられるときです。保育園と家庭と一緒にトイレトレーニングに向けて頑張る、出来たときは保護者と一緒に喜びます。」

質問：4年生吉井さん

「現在特別養護老人ホームでアルバイトをしています。アルバイトに行くと、先週話をしていた利

用者が亡くなっていたということがありました。4月から高齢者施設で働きますが、死に対する不安があります。向き合い方や切り替え方を聴きたいです。」

回答：山下さん

「急な看取りもあります。その時は、ショックが大きく受け止められないこともあります。切り替えようとしても、難しいこともあります。部屋が空所になれば、新しく入所される利用者をお迎えし、現実に関わりを振り返り、同僚やご遺族と語り合うことで、気持ちを整理し切り替えていけることが多くあります。」

質問：4年生吉井さん

「亡くなられた利用者と一緒に過ごされていた利用者へのケアは何かされていますか？」

回答：山下さん

「夫婦・親子で同じ施設にいらっしゃることもあります。どちらかが亡くなられたときは、残された利用者のサポートをしています。私は経験したことはないのですが、例えば、日々の会話を増やすこと、散歩・行事への参加を促すことなど、寂しく感じる時間を減らすような声掛けをしていくことができると思います。」

質問：4年生米川さん

「職員と利用者の比率に関して、感じていることはありますか？」

回答：山下さん

「1つのフロアに利用者約30名、職員は約20名が勤務しています。職員の退職などで人員が足りないときがあります。そのようなときは、一人ひとりに関わる時間が短いと感じています。深く関わりたいと思いつつながら現状の難しさを感じています。」

回答：重村さん

「園児0歳から5歳で約100名が通っています。保育士の配置基準は満たしていますが、乳児クラスは職員がもう少し多い方が理想的ではないかと感じています。」

回答：村上さん

「統合失調症等精神疾患の方を中心に約40名が利用され、職員は約10名が働いています。利用者の相談は、別室で受けています。そのため、業務に追われているときは、その業務が終わってから相談時間を取っています。待っていただいていることが申し訳ないのですが、難しいのが現状です。その状況を変えることができれば良いと思っています。」



Ⅲ. 総括

今回の大会テーマは、「学び続けること、実践をふりかえることの意義を問う」でした。今回発表していただいた卒業生の皆さんは、研修会への参加や、自らの実践をふりかえることをきっかけとして、福祉の専門職として働いて行く上で、学び続ける姿勢が大切であることに気付いたと語ってくださいました。そしてその姿は在校生にも大きな学びになったのではないのでしょうか。特に今回は実際の事例を挙げての説明だったこともあり、在校生にとっても大きな刺激となりました。

今後も本学会は、卒業生と在学生の「タテの繋

がり」を活かした取り組みを展開していきたいと考えています。来年度も実りある学会になるよう多くの在學生、卒業生の参加を期待したいと思います。

